2023年5月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第556号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体136円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター
編集　アクセス編集委員会
〒162-0836　東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

ウクライナ侵攻と成文社の30年

中東欧・ロシアの歴史、文化、日本との関係史などを中心に活動を続けてきた

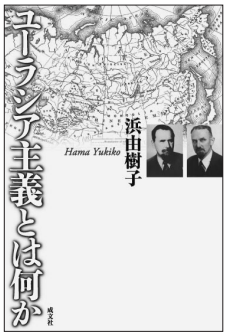
文・南里功（成文社代表）

成文社は1993年春に『マサリクとの対話――哲人大統領の生涯と思想』（カレル・チャペック著／石川達夫訳）を出すことで本格的に活動を始めた。チェコスロヴァキアの初代大統領を描いたこの作品は、1989年のビロード革命などの東欧の民主化、続くソ連邦の崩壊などにより、その遠因を探るものとして比較的よく読まれた。版元としては良いスタートが切れたわけだが、以来、中東欧・ロシアの歴史、文化、日本との関係史などを中心に活動を続けてきた。それから今年でもう30年となる。時の経過に感慨を覚えずにはおれないが、今年はまたロシアがウクライナに侵攻してから1年が経ってしまった年でもある。中東欧・ロシアの関連書を出してきた版元として気付いたことなどを述べておきたい。

侵攻と2つの書籍

2020年からのコロナ禍で本の動きが鈍り、それは今でも続いているが、ロシアのウクライナ侵攻では、むしろロシアの歴史書の動きは多少増したように思う。『マサリクとの対話』や『ロシアとヨーロッパ』全3巻（マサリク著／石川達夫、長與進訳、2002-2005）などはコンスタントに出て行っているが、動きが顕著だった2つの書籍を紹介しよう。

1つは『ユーラシア主義とは何か』（浜由樹子著、2010）で、侵攻時に品切れ状態だったが、侵攻後にネット上で話題となり増刷した。ユーラシア主義は、ロシアはヨーロッパでもアジアでもなくユーラシアであるとする主張で、1920年代のロシア人亡命者の中から生まれた思想潮流に源を発している。その歴史的起源を、創始者であるトルベツコイとサヴィツキーの2人の人物に即して解明し、戦間期国際関係史の中へ位置づけようとするものである。プーチンのブレインと言われるドゥーギンが標榜するネオ・ユーラシア主義が、侵攻時に取り沙汰された。そのネオ・ユーラシア主義がユーラシア主義に繋がるのではないかということで需要があったのである。



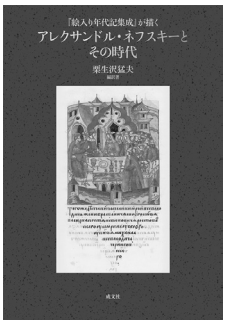
『ユーラシア主義とは何か』
ISBN978-4-915730-78-8

もう1つは『《ロシア原初年代記》を読む――キエフ・ルーシとヨーロッパ、あるいは「ロシアとヨーロッパ」についての覚書』（栗生沢猛夫著、2015）で、A5判1056頁、本体16,000円であったにも関わらず、侵攻後に着実に出ていった。ロシアにおける最初の国家キエフ・ルーシの歴史は、これまでスカンディナヴィアからギリシアに至る南北の道を中心として描かれてきたが、それを従来見過ごされがちであった西方ヨーロッパとの関係（東西の道）に重点をおいて見直していく。キエフ・ルーシが、それ自体形成途上にあるヨーロッパの一員としてその歴史的歩みを始めたことを《原初年代記》を軸に、膨大な史料を駆使しながら示していくものである。この本について、山内昌之氏は「ここに書かれていることを理解しないと、いまのウクライナとロシアとの抗争〔2014年、ロシアのクリミア併合の時の抗争〕の本質にはたどり着けないと言っても過言ではない」と語っている（『新・地政学』中公新書ラクレ、2016）。そのポイントは「キエフ・ルーシをロシア史として見るのか、ウクライナ史で捉えるのか」である、と。キエフ・ルーシの遺産と歴史を引き継ぐのはロシアなのか、ウクライナなのか。それに対して著者は「キエフ・ルーシはその豊かな歴史的遺産をもって、その価値を尊重しようと思う者すべてにとって等しく開かれているのである」とするのである。

『《ロシア原初年代記》を読む』ISBN978-4-86520-011-9

歴史に還る

同じ著者による書籍はその後も『イヴァン雷帝の《絵入り年代記集成》――モスクワ国家の公式的大図解年代記研究序説』（2019）、『《絵入り年代記集成》が描くアレクサンドル・ネフスキーとその時代』全2巻（2022）と続けて出している。「天地創造」からの「世界史」とそれに続く16世紀までのロシアの歴



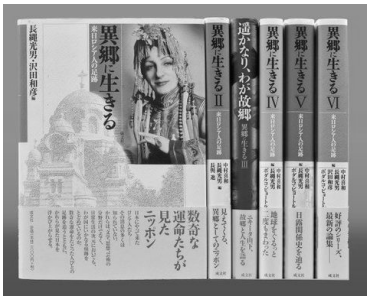
『《絵入り年代記集成》が描くアレクサンドル・ネフスキーとその時代』
ISBN978-4-86520-057-7

史を1万7000余にのぼる極彩色の細密画で描き出そうとする《絵入り年代記集成》が2009～2010年にロシアで初めて刊行された。全40巻の豪華本である。前著は、この《集成》はなぜこれまで日の目を見ることがなかったのか。謎の解明を目指すと同時に、その全体構成と内容、史料としての意義について多数の細密画を例に挙げながら具体的に考察するものである。後著は、その《絵入り年代記集成》はアレクサンドル・ネフスキーとその時代をどう描いているか。296枚の極彩色の絵と年代記テクストから探っていく。絵は、中世ロシア人とドイツ人、スウェーデン人、モンゴル人などとの戦いの様子、また当時の生活の諸局面（結婚、出産、死）や天変地異（地震、洪水、旱魃、天体現象）、災害（火災、飢饉、疫病）などが生々しく描かれる。それを描かせた、そして描いた人々の思惑、そこから立ち現れてくる歴史の実像に迫ろうとするものである。

アレクサンドル・ネフスキーはロシアの英雄で、その度合いは長い時間をかけてますます増してきた。2021年には生誕800年祭を祝うさまざまな催しが行われ、プスコフ州の新記念館の除幕式にはプーチンが出席している。しかし、その実像はタタールのくびきの下で、モンゴル帝国の徴税請負人だったという側面もあった。著者は「アレクサンドルの名がたんに人々の関心を惹きつけるためだけの符丁として用いられるだけならば、何も事を荒立てる必要はないだろう。しかし人々を一定の枠組みの中に押し込め、異論を封じる手段となすべくその名を利用しようとする、その時々の指導者層の思惑についてはどうであろうか」と問題を提起している。地道に丹念に多くの史料に向き合っていくことでしか、歴史を知ることはできないという著者の姿勢には深く肯首できるものがある。

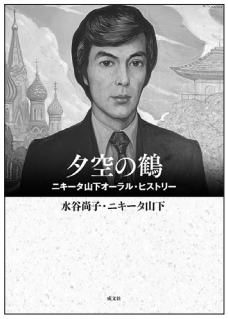
日露関係史を辿る

成文社では日露関係史の書籍も比較的よく出してきた。日本人とロシア人の交流の歴史を掘り起こす「来日ロシア人研究会」で報告、講演されてきたものを集めた『異郷に生きる』シリーズは、2001年に第1巻の刊行で始まり、2016年の第6巻まで続いて完結した（編者は、中村喜和、安井亮平、長縄光男、長與進、沢田和彦、ポダルコ・ピョートルの各氏が2、3名ずつ交代で務めた）。この研究会は1977年秋に発足した「〈ロシアと日本〉研究会」を引き継いだもの。1917年のロシア革命以後、難民として日本に移り住んだ多数のロシア人についての記録を残そうと始まった。「来日ロシア人研究会」はその趣旨を受け継ぎ、1995年から活動を開始。参加者を学者だけでなく市井の人々にも広げて、2カ月に1度の会合を重ねた。21年にわたって続いてきた「研究会」では、江戸時代から続く日露の交流を日常、経済、文化、音楽など幅広く拾い集め、記録として残してきた。100回目の例会（2016年）を機に活動を休止したが、その後も「日露交流史研究会」という後継研究会が活動を続けている。この会の会員たちが個別に著作を出すこともあった。『白系ロシア人と日本文化』（沢田和彦著、2007）、『日露交流都市物語』（同、2014）、『ブロニスワフ・ピウスツキ伝――〈アイヌ王〉と呼ばれたポーランド人』（同、2019）、『ニコライ堂遺聞』（長縄光男著、2007）、『「ロシア・モダニズム」を生きる――日本とロシア、コトバとヒトのネットワーク』（太田丈太郎著、2014）、『イリーナさんというひと――ソ連という時間をさがして』（同、2020）、『「北洋」の誕生――場と人と物語』（神長英輔著、2014）といった書籍である。



『異郷に生きる』シリーズ　Ⅰ～Ⅵ
来日ロシア人の足跡Ⅰ　ISBN4-915730-29-8
来日ロシア人の足跡Ⅱ　ISBN4-915730-38-7
遥かなり、わが故郷Ⅲ　ISBN4-915730-48-4
来日ロシア人の足跡Ⅳ　ISBN978-4-915730-69-6
来日ロシア人の足跡Ⅴ　ISBN978-4-915730-80-1
来日ロシア人の足跡Ⅵ　ISBN978-4-86520-022-5

昨年のウクライナ侵攻後には、かつて研究会で講演した人物の書籍『夕空の鶴――ニキータ山下オーラル・ヒストリー』（水谷尚子、ニキータ山下著、2022）を出した。日本とロシア、中国の血筋を引くニキータは、コーラスグループ「ロイヤルナイツ」のメンバーとして60、70年代に人気を博し、同時代のソ連邦ではアイドル的存在であった。あのゴルバチョフもかれのファンだったという。五木寛之に「日本で一番美しいロシア語を話す人」と讃えられ、NHKテレビ「ロシア語講座」では看板出演者となり、そのルックスと甘美なバリトンから、男女を問わず多くの人に愛された。また、日本とロシアの政治、経済、芸術の交流現場に立ち続けてきた人物でもあった。この本は「語るように歌い、歌うように語る」ニキータの声を聴こうとするもので、かれ独唱の音楽CD付きである。ニキータは本の末尾で述懐している。「破壊された街や村の映像を見ていると、ソ連時代に訪れた思い出がいくらでも走馬灯のように頭の中を駆け巡り、心が締め付けられる。私が大切に歌い続けている「鶴」や「ロシアの草原」の作曲者ヤン・フレンケリもキエフ〔キーウ〕出身のユダヤ系ロシア人だった。思い出の地が無残な瓦礫の街になっているのを見るのは、本当に辛い。満洲に暮らした子ども時代、日本の敗戦後の混乱と引き揚げを経験した私は、ウクライナの復興と、その地の人々に平和がもたらされることを祈らずにはいられない」。



『夕空の鶴』
ISBN978-4-86520-061-4

侵攻の終息

さて、ウクライナ侵攻である。1年を経てその終息はまだ予兆さえ見せていない。アメリカ・西側諸国のウクライナ支援がエスカレートしても、それが終息へ向かう手段であるとも思えない。ロシア、ベラルーシは？　強権な国家の綻びはわずかにしか聞こえてこない。しかしそれを歴史的に見てみると――。この秋に刊行を予定している『ロシア・東欧の抵抗精神』（石川達夫、

前田和泉、貝澤哉、奈倉有里、西成彦著）は長い歴史のなかで権力に対峙し、いまもそれを続けている人々や思想をロシア、ベラルーシ、ウクライナ、ポーランド、チェコのなかに見ていこうというものである。2022年秋に行われた日本ロシア文学会と日本スラヴ学研究会の合同公開シンポジウムの報告がもとになっているが、原稿はこれから。一読者として、侵攻し、侵攻され、難民を引き受けている当事国の人々の届かない声をぜひ聴いてみたいものだ。

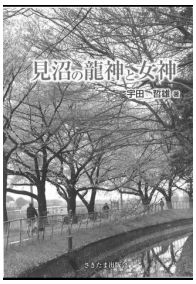
＊

（なんりいさお　成文社）

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

『見沼の龍神と女神』●宇田哲雄 著



埼玉県東部に広がっている見沼田圃は、もとは沖積低地が沼沢化した広大な自然な沼で、古来より「御沼」「神沼」「三沼」「箕沼」とも書かれており、さいたま市緑区宮本に鎮座する氷川女體神社の御手洗瀬として神聖視されてきた。そこから、江戸時代の二度にわたる大規模新田開発によって新田となった。すなわち、寛永6年（1629）に幕府代官、伊奈忠治によって約12㎢の溜井が造成されてそこから分水された用水路で下流域が灌漑、干拓され、さらには享保13（1728）、井沢弥惣兵衛為永によって利根川から延長80kmにも及ぶ見沼代用水を引くことにより見沼干拓が完成したのである。この見沼代用水は、2019年に国際かんがい排水施設委員会（ICID）により、世界かんがい施設遺産に認定・登録された。本書は、この見沼の歴史と当地の伝説、信仰を照応させながら、見沼研究の新たな視点を提供するものである。

もとより見沼周辺には「龍」「大蛇」「ゴイゴイ」「オタケ様」など様々な呼び名で伝わる沼の主にまつわる伝説が多く残っているが、見沼開発に関わるものとして、干拓事業にとりかかった井沢弥惣兵衛為永のところに夜な夜な美女が現れて「自分は見沼の主であるが沼を干すのをやめてもらいたい」と言った、という話が伝わっている。為永はその後干拓事業で災難に直面し自身も病となったという。別の伝説では沼の主が「自分に三町四方の田を残してほしい」と為永に願ったが、為永は、それは難しいこととして寺に神燈を寄進し「龍神燈」として主を慰めることにした。事業完成後には、主は見沼に棲めなくなったので千葉の印旛沼に行った、あるいは信州の諏訪湖に移り棲んだ、という龍神引っ越し伝説も残る。これらの伝説を通観すると、開発事業に際しての人々の土地神への恐れや葛藤を読み取れる、と著者は言う。

ところで古くより見沼を御手洗瀬としてきた氷川女體神社の主祭神は素戔嗚尊の妃である奇稲田媛尊である。またその近くには素戔嗚尊を主祭神とする武蔵一宮、氷川神社が鎮座している。見沼信仰研究において、これら見沼地方の信仰が出雲国の氷川信仰の移入したものとする説があるのを著者は踏まえながらも、氷川信仰以前から見沼では「みぬま神」という女神による聖水信仰の祭祀が行われていたとしている。それが古代になって出雲からの氷川信仰と習合されたのだと。これは、聖なる水を管理して神や貴人の誕生、再生の禊ぎの儀礼に関わった女神「みぬま神」について考察した折口信夫の『水の女』を参照しての著者の見立てである。ここから、見沼周辺に木花咲耶姫を祀った浅間神社が多いこと、宗像社や他の女體社、為永が見沼代用水路沿いに整備した弁天社などについても言及して、見沼と女神信仰との親和性というところに視点を広げる。そして、そう言い切っているわけではないのだが、龍神の化身として美女など、この地に多く残る美女伝説についても、最古の地方神としての「みぬまの女神」の面影を著者は見ているように読める。（N）

◆1800円・四六判・182頁・**さきたま出版会**・埼玉・202303刊・ISBN9784878914874

『ボーダーツーリズムの記録　１９９７－２０２２ －国境に立って、感じて、撮った』●斉藤マサヨシ 著

現在陸続きで他国と国境を接していない日本では、普段国境というものを意識することはあまりないかもしれません。しかし海の国境は存在しますし、かつて日本の領域が膨張していた時代には、今よりもっと長い「国境」が存在しました。

本書は著者がそんな国境を巡ってきた「ボーダーツーリズム」の記録を多くの写真と共にまとめたものです。旅の始まりは著者の住む稚内。今も残る稚泊航路のドームは、かつて樺太（サハリン）への玄関口だった記憶を今に伝えます。そして対岸のサハリンには日本の軍事施設・産業施設などの跡もあり、終戦時のソ連侵攻による悲しい記憶も残されています。そのほかにもノモンハン・ペリリュー島・占守島など国境の地はかつての戦争の記憶を色濃くとどめ続ける土地でもあります。一方でかつての満洲国とソビエト国境は今もロシアと中国の国境としてマトリョーシカ型のホテルが建っていたり、独自の賑わいを見せています。対馬も韓国からの旅行者が大勢やってくるなど国境ならではの独特の雰囲気も見逃せません。与那国・稚内など今は行き止まりの地もその先と再び繋がっていけば、かつての賑わいが戻ってくるのでしょうか。いくつもの国境が見せる姿はそんな想像まで掻き立ててくれます。また国境に広がる美しい自然や風景の写真も本書の魅力のひとつです。とりわけ中ロ国境の見渡す限りの大平原は、その上に人為的に国境を引くことのむなしさも感じさせますね。（副隊長）

◆5200円・B5判・212頁・**北海道大学出版会**・北海道・202303刊・ISBN9784832934177

『詩と散策』●ハン・ジョンウォン 著／橋本智保 訳

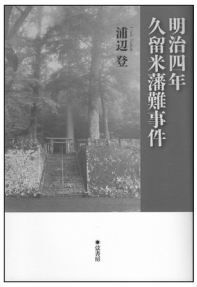
散歩を愛し、歩きながら見たり聞いたりした、すべての些細なことを大切ししてきた著者。詩人でもあり、彼女が愛する詩人たちの詩が文章の中に散りばめられている。

冬を愛する理由は百個ほどあるが、その一から百までがすべて“雪”。それほどまでに雪を愛する著者は、自分と飼い猫の生まれ月なので11月を偏愛していると告白。11という数字は、二本の木のように見えて、11月の森の中に出かけてみる。心が傷ついた時には海に行きたくてたまらなくなる。散策だけではなく、姉との思い出、閉鎖病棟でのボランティア活動から導き出されたことも深く静かに語っている。〈長く使うと体の関節が擦り減るように心も擦り減る。だから“人生百年”というのは残酷だと思う。人間には百年も使える心はない〉と、老いについて思いを馳せ、先述の海の前では心の中をさらけ出して叫ぶ。〈海で最も密度が高いのは、砂でも塩でもなく、秘密かもしれない〉と、支えにしている。映画も学んだ著者らしく、映画の紹介も多い。オクタビオ・パスの詩から始まり、ボルヘスで締めくくられるが、間には金子みすゞや和歌も引用され、日本の読者にとっても親しみやすい。

散歩者であると同時に収集者でもあるという著者は実際に葉や石などを拾うが、一方で音や言葉といった耳を澄ませて拾うものもあり、そこからまた世界が広がっていく。読むと散歩しているような気分にさせられる。移ろいゆく季節も表現され、25編それぞれがきらめく詩のような美しいエッセイ集。（Y）

◆1600円・188mm × 122mm判・148頁・**書肆侃侃房**・福岡・202302刊・ISBN9784863855601

『明治四年・久留米藩難事件』●浦辺登 著



明治維新後の反政府行動は、明治7年の佐賀の変に始まり、萩の変などを経て、10年の西南戦争に行きつくとされ、それに先立つ4年に、久留米藩難事件あるいは大楽源太郎事件と呼ばれる事件があったことはほとんど取り上げられることがない。

長州藩で藩兵解除反対騒動を起こして脱藩した大楽を、久留米藩の小河真文らが匿い、これを発端に2府39県に波及して260名以上が処分された大事件である。ほかの事件が不平士族の反乱であったのに対し、この事件は、社会底辺の人々が幸福を実感できていないとして草莽の医師や農民を統括する庄屋層が加担し、徹底抗戦を主張した特異性を有している。しかし、新政府の厳しい追及に、大楽は当初匿ってくれた者たちの手によって殺害され、小河も処刑される。藩内の佐幕、勤王両派の凄惨な権力闘争や、石高21万石の小藩でありながら7隻もの艦船を保有して久留米海軍というべき軍事力を備えた幕末の動向を前史に、事件後に自由民権運動につながっていくまでの道筋を、関係地域の自治体史誌や大楽ら事件関係者の慰霊碑文を丹念に読み解き、関係者の人物像を浮かび上がらせて、複雑極まる事件の真相に迫る。巻末に処罰対象者の一覧が掲げられている。わが国の近代化が多くの有為の人材の犠牲を伴うものであったことに胸が痛む。明治維新とは何であったのか、まだ見過ごしているものがありはしないか。この事件から学ぶことは多いとの指摘に考えさせられる。（飯澤文夫）

◆2000円・四六判・213頁・**弦書房**・福岡・202302刊・ISBN9784863292635

『秩父廃寺録』●堀口進午 著

四方を山に囲まれた埼玉県秩父地方には、独自の文化が育ちやすい。しかし、孤立した独自の文化は滅び、埋もれやすいという側面を持っている。秩父市街からほど近い浦山地区の山中にはたくさんの廃村が所在しており、首都圏からならば、日帰りでその一端に触れることができる。元中学校教師の著者は、定年退職によって得た時間を使って秩父を対象に野外調査を続けているうちに、廃寺（お堂、地蔵、石塔など寺に係わるものを含む）という掘り下げるべきものを見つけた。そこにたどり着くまでには、手引きとなる資料との出会い、地域の方々との出会いがあった。

本書では資料「新編武蔵風土記稿」に載った203か所に、著者が新たに見出だした80か所（修験道関係36か所、その他44か所）を加えた全283か所の廃寺について、寺院名、所在地、地図、説明、写真が各1ページでまとめられている。203か所は2年でまとまったが、80か所を調べるにはさらに5年かかったという。振り返って著者は「ひとつの手がかりから、闇の中の廃寺がその姿を現していく過程が楽しい」と語っている。遠い昔から脈々と続いていた信仰の歴史の一端が、廃寺という形であぶり出されている。

時代の流れがとても早い昨今、ひととき時間が止まるほど没頭できるものは何なのだろうか。秩父でそれを見つけた著者の笑顔が垣間見れた。（HEYANEKO）

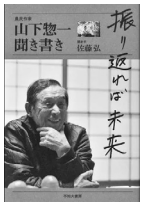
◆2500円・A4判・306頁・**まつやま書房**・埼玉・202302刊・ISBN9784896231793

売行良好書

期間：2023年3月15日～4月14日
※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

［出荷センター扱い］

(1)『あなたのための短歌集』1700円・ナナロク社　(2)『特別報道写真集　大谷翔平２０２２　伝説を超えた二刀流』1300円・岩手日報社　(3)『絵本のまにまに』1800円・石風社　(4)『ランプシェード』3000円・東京子ども図書館　(5)『振り返れば未来　山下惣一聞き書き』2000円・不知火書房　(6)『新装版　江戸という幻景』1800円・弦書房　(7)『野球短歌』1600円・ナナロク社　(8)『記者のためのオープンデータ活用ハンドブック』700円・新聞通信調査会　(9)『出雲王国とヤマト政権』2250円・大元出版　(10)『極度の心配性で苦しむ私は、強迫性障害でした！！』1300円・燦燦舎　(11)『ミャンマーの民主化を求めて　立ち上がる在日ミャンマー人と日本の市民社会』1100円・寿郎社　(12)『日本全国タイル遊覧』1900円・書肆侃侃房



［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］

(1)『間違いだらけの「マインドコントロール」論』1200円・賢仁舎　(2)『公民館のしあさって』2200円・ボーダーインク　(3)『水上バス浅草行き』1700円・ナナロク社　(4)『ヨコエビはなぜ「横」になるのか』2400円・広島大学出版会　(5)『満洲国の近代建築遺産』8000円・中国書店（集広舎）　(6)『ジソウのお仕事　データ改訂版』1800円・フェミックス　(7)『新装版　江戸という幻景』1800円・弦書房　(8)『調査されるという迷惑』1000円・みずのわ出版　(9)『伊達稙宗　奥州王への夢』3500円・高志書院　(10)『汚れた歳月』2800円・エディションイレーヌ　(11)『沖縄さかな図鑑』1800円・沖縄タイムス社　(12)『広域蜂起　秩父事件』1600円・まつやま書房　(13)『振り返れば未来　山下惣一聞き書き』2000円・不知火書房　(14)『世界から学ぶ幸せな子育て』1300円・リーブル出版　(15)『サルタ彦大神と竜』2000円・大元出版　(16)『会津西街道の歴史を歩く』1500円・随想舎

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼長い間弊社にて取り扱いをさせていただいている深夜叢書社の社主にして、名編集者と言われた齋藤愼爾さんが3月28日に亡くなりました。享年83歳でした。ソウル生まれ、1946年に酒田市の飛鳥に移住。酒田東高校在学時から俳句を始め、山形大学在学中に第8回氷海賞を受賞。山形大学中退後の1963年に深夜叢書社を設立、創業出版は【現代史の視点ー進歩的知識人論】（宍戸恭一著）。その後、主に文学関係の本を刊行してきました。【「反核」異論】（吉本隆明）、【「近代文学」創刊のころ】（埴谷雄高編）、【他人の夢】（中井英夫）、【黄金郷】（上野ちづ子）等々。深夜叢書社のISBNが付与されている刊行物は現時点で327点、ISBN付与以前の同社刊行物を含めると約600点余を60年間で世出したことになります。2000年4月刊の吉本隆明著【学校・宗教・家族の病理】は日本で初めて「非再販本」として流通し、弊社扱いで約8000部を販売しました。また最近では、瀬戸内寂聴さんの【句集　ひとり】（2017年6月刊）が話題となりました。齋藤さんは文芸評論や評伝執筆など多方面で仕事をされていましたが、寺山修司らと俳誌【雷帝】を刊行するなど俳人としても活躍していました。句集に【冬の智慧】（東京四季出版 1992）、【陸沈】（東京四季出版 2016年）等。ご冥福をお祈りいたします。

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

honto
ネット通販で地方・小出版流通センター扱い
本がご購入いただけます。
honto.jp
hontoではお客様の読書スタイルにあわせて
電子書籍でも紙の本でもご購入でき、hontoポイントは
ネットでも書店でも使えて、貯められます。
地方・小出版流通センター扱いのご当地本もネットで
ご購入いただけます。
くわしくは honto.jp へアクセスください。